
焰駆けつ

鍋木恵梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰駆けつ

【Nコード】

N4235C

【作者名】

鍋木恵梨

【あらすじ】

寿永三（1184）年。丹波国今田荘の、ひとりの陶工が見た源平合戦。源義経の平家追討前哨戦である「三草山の戦い」を庶民の立場から描き、「いくさ」とは何かを問い直した歴史中編。

常なれば、摂津住吉本社まで参ることはなかつた。

私は荘官の係累とはいえ、生まれ出でしより今田^{こんだ}荘に居し、今やひとりの陶工にすぎぬ。その私が本社まで出向いたは、ゆえ有つてのことである。

ここ数年、うち続く凶作。それはこの今田荘だけの話ではない。諸処、似た話を聞く。さらに非道な語りも耳にしている。

この荘もこのままでは飢えを待つばかり、「口減らし」「姥すてやむなしと、たれともなく口にするようになった。

だが待てよ、と私たち若い陶工衆は知恵を絞った。

……近來焼きはじめた陶を献じればなんとかならないだろうか。

それには、納めるに足る質と数を確保せねばならぬ。

ひとつの窯で一度に出来る数は、数個。一度の焼成にかかる期間は、半月。

私をはじめ、陶工は眠らず休まず窯を見守った。

穴窯の中駆けめぐる焰。その奥に沈む土塊。

冬が来てさえ、私は毎日汗を幾筋伝わせていた。土の色の変化を、形の歪みのないことを見張り続けていた。

正月を越えた頃、幾たびめかの雪の朝。

秋以来、のぼり続けていた窯の煙を止めうる時が来た。

三本峠の穴窯の耳壺十ほど、同じものが揃ったのだ。ひと列にずらり並べて、その比類無き出来映えに私は息を呑んだ。

……なんと端正な姿態、繊細な彩紋、そして灰色の深みの美しきかな。

この焼物に携わった工人どもは、顔の土を涙で洗い流した。そう、あまりの美しさにだ。

この宝を、みな手放すことを惜しんだ。

否。

この品を届け、莊倉を開かねばならぬ。来春の菜作りも待てぬのだ。耳壺は、間違はなく目の肥えた歴々を満足させるであろう。揃いの物を焼き上げる技も認められるはずだ。年祖減免も必ずや聞き届けられよう。

……一刻も早く届けねばならぬ。本領を守り動かぬ莊官の来所を待てはせぬ。

源氏が東国より都に攻め上る世情。帝や天上の方々、それに平家の公達が福原新京に旧都にと行きつ帰りつする有様。莊官は内々のことは莊内の者に任せ、なかなか現地に下り来ることはない。

私は残雪微かな峠を越え、住吉社へ赴いた。

そして、思いがけなく上首尾となった。暫時、莊官との目通りが叶い、永年半済の発給を得たのである。未来永劫年祖が今までの半分となり、しかも今年は半分を戻すというのだ。

私は一刻も早く莊の者に知らせんと、すぐに本社を発った。

その帰途。

伊子志いそしの渡し舟の上であつたか。私はこんな話を耳にした。

「またいくさじゃ」

「源氏なぞも平安の都におらしやるだけでこと足れりとしてくれぬかの。とんだ迷惑じゃ」

平家の方々が福原を出立し、範頼義経なる源氏の御曹司を迎え討つ。その平家方が「三草山みくさ」に布陣するという。

三草山は、今田莊よりほんの数里の山である。

……早う武庫むくの川を渡りきらぬものか。

船酔いか、不安にさいなまれたか。私は急に胸がつかえ、ひざから崩れた。

軀は動かぬというに、ただ気だけが急いていた。

二

夜を徹し歩き、今田荘に着いたのは、山の端が明けの光に満ちる朝であつただろうか。

今田荘は深い霧に覆われていた。

すべてが白く、刺すような気が身体の末端にまとわりつく。

私はそれを振り切るように歩を進めた。

農夫は、眠りから覚めたばかりだったのだと思う。

農夫とは声無くすれ違った。行き交うまで私が居ると気づかなかつた。

彼が声を上げたのは、私に気づいたからではない。二人の下人、四頭の馬が運ぶ俵を見たからだ。

「皆を集めてくれまいか」

私がそう頼むと、嘆息とも喘ぎともつかぬ声のあと、彼は何度も首を縦に振った。

まるで、言葉を知らぬ者のようであつた。

霧は、山の奥へと流れ往きつつある。

馬は霧が残していった湿り気をたてがみに忍ばせ、静かに佇んでいた。日が高くなるにしたがい、その湿り気は山間を吹き抜ける風にさらされてゆく。

村の老人たちは馬を取り囲んだ。

そして喧々諤々と話し続けていた。

……米は手に入った。これなら夏まで生きながらえることが出来るだろう。

……上手く乗り切れた。めでたいことである。

実りの無い繰り言がただ綴られていく。

老人たちはその愚昧さに気づいている。だが、たれもその先には進めない。

この先のことを、たれも考えてはいなかったのだ。
今回ばかりは、私たち必死の思いで焼き上げた。

その思いが天に通じたのだろう。摩訶不思議なほどに思いの通り、
上手くいったのだ。

今、私は思う。

新しき器を焼くことも天啓であり、事実焼けたことも天恵であつたのだ。

だが、次は天に任せていられぬ。質、量とも出来映えにむらがあるようでは駄目だ。

永年半済の約定に見合う器を、作りつづけねば。

それには、今のままではどうにもならぬ。

あの焼物が出来る窯がただひとつというのは心細い。

……せめて、いまひとつ有れば。

小野原には古くより器を作ってきた窯がある。

その窯では、生活のためや、周囲の村落との物々交換のための器を焼いている。

他にも窯はあるが、村落の中心で多くを担うのは小野原窯だ。

「この小野原の窯も、三本峠と同じものを焼けるようにしたいのです」

私はそう切り出した。

「小野原の窯を潰すなぞ出来ない話や」

「ここなら」私は体の奥から突き上げるものを感じた、「この小野原なら人が集められるのです。焼成だけ、野良だけに手をとられることはないのだから」

三本峠の窯を中心とすれば、陶工はそこに釘づけとなる。三本峠は村落から離れすぎているからだ。だが小野原は今田荘本荘の隣の集落。田畑の仕事があるときにでも、窯に目配りができるのだ。

……それに、私の母は小野原にいる。

病がちの母を忘れ土に向かう日々は、辛かった。

「なるほど」

老人たちは静かに首をもたげた。

「任せたぞ。窯を立て器を焼くは、そこもと等のしごと」

私は唇を結んだ。

頭の中では天へ上るような高揚感を感じながら、一方体ではどっしりとした重量感を強く覚えた。

この村の行く先を任されたことへの充実感と、行く末を左右することへの責任感。それぞれを頭と身体が別に捉えている様だった。

……そうだ、母は。

持て余し気味の思考から逃げようと、母に意識を向けた。

私が莊を発つ前も、あまり具合は良くなかった。隣家の娘に頼んではいたのだが。

私は馬と食料の倉納めを任せて、気もそぞろに家路を急いだ。

三

小野原集落の北側、小高いところに広い屋敷がある。

その屋敷の側の、川から引いた井より水を汲む娘がひとり、いた。水は汲み終えたのだろ。娘が背中を反らせて甕を抱える。水がこぼれ落ちる。その痕はすぐに乾きもせず斑に標となっていた。

娘は、ふと首を傾けた。

「今戻りました」

その娘、さえは大きく目を見開いた。

「さえ殿」

私がもう一声かけてもなお、その人は無言で足を止めたまま、ただ目元を輝かせていた。

二十年ばかり前のこと。

荘官は、その館を私の母のために建てさせた。

荘官の本屋敷のように垣に囲まれてもないし畑もごく小さいのだが、この小野原の集落ではどの家より広い。主屋・台所・便所を備え、庭木もあり、草置を一置置いた部屋もある。

だがそれは、ひどく分相応な住居であった。

今住まうのは母と私のみ。二十年の歲月、われわれ母子にはただ広いばかりのがらんだの館であった。

私が村を出るにあたり、心配は母だけであった。

元来体の弱い人であったが、この冬はとくに伏せることが多かった。

私には迷いが生じた。

一年の半分を峠の窯で過ごした上、さらにこの空虚な館に母を残していくということ。

それがどれだけ親不孝であり、母の心に負担となるだろうか。

「ご心配なさいますな」娘は私にはつきりと言った、「隣には私が

おります。私では心配ですか」

私は思わず大声で答えた。

いや、そうではない。そんなはずはない。

それどころか、幼馴染の娘がこれほど頼もしく見えたことはない。「おのれのため莊に尽くすことを迷うておらるるとお知りになれば、いつそうお心を痛め申しあげることになりますよ」

それも分かっていた。

分かっていながら、辛かった。

だが、この娘なら心配ない。後顧を憂うことなく任せられる。

「ありがとう。お頼み申し上げます」

「なんです、改まって。幼馴染ではありませんか」

娘は軽く笑った。

本当にありがたかった。

感謝の念をあらわすのももどかしく、抑えがたく堰を切って目よりあふれ出る。

そうだ、娘を見下ろすようになったのはずいぶん昔のことだった。しかし今、娘は私を見守るような視線を送っている。小さな子供を見下ろすように。

「本当に、ありがとう」

私は温かく包まれた。

わらの山の中に寝そべった、そんな気持ちであった。

……久方ぶりの対面である。

柔らいだ気持ちが再び戻ってきた。まるで昨日のようにも遠い昔のようにも覚える。

「よくご無事でお帰り。お疲れでしょう」

「母は」

私が一言発すると、娘は目を細めた。

「ご健勝です」

「良かった」

あなたのお蔭だ、と云うのは気恥ずかしい。

代わりに私は云った。

「甕を持ちましょう。運ぶ途中やったでしょう」

遠慮がちな娘から甕を無理に受け取ると、私は歩を進めた。

追いつき、追い越そうとする娘の頬は、ほのかに紅を差しているように見える。だが麻に隠した体は、以前に増してやせ細っていた。早くお顔をお見せなさいな。ええ、そうします。お心は強く持たれておいででしたけど、首を長くして待つてらっしゃるに違いありません。そうですね、早く安心してもらわねば。毎日蔭膳を据えておいででした、ご自分のお食事から。まったくあの人は、私ももっと早く帰ってこれたなら。

ことばの絡み合いはしばらく続いた。

だが私が甕を台所に置くと、娘は静かに、断ち切るように云った。

「ありがとうございます。ではわたしはこれで」

私は慌てて娘の行く手をさえぎった。

「さえ殿。どうかお寄り下さい」

「今日ばかりは水入らずでお過ごしになられて下さい」

「そうはいきません」私は強く云った、「私からも母からも改めて御礼をせねば」

娘の目は戸惑いを隠せないようだった。

私もまた、無言で私を見返す人に次のことばを継がないでいる。ふと、館の外で騒ぐ声が聞こえた。

お互いに意識を外に逸らした。

「大変じゃあ、大変じゃあ」

不穏な空気を壁越しに感じ取り、私は外に出た。

四

「大変じゃ」若者が幾度も声を上げ、東の坂から転がるように駆けてきた、「武士どもがこちらに向かつておる！」

日の光が私の足元を走り去ってゆく。

そして、この村に残されたのは、重苦しく立ち込めた曇り空であった。

「武士とや」

私は東を見た。

坂の向こうへ、雲は流れていく。

「いくさや」

たれかの呟きが漏れた。

風の音のようだった。

いつの間によら、集落の者は集まり、ざわめきとおののきが辺りを駆け巡った。

私は再び、荘の中心へと戻っていった。

「皆！」そこでは長老は枯れた喉を絞り上げていた、「米を隠せ！手分けせい！」

「どこや」

「どこへや」

「本荘のお蔵へか」

百姓名の蔵など隠したことにはならない。真っ先に武士どもが乗り込み、徴発してゆくだろう。

私は叫んだ。

「本荘の、森だ！」

……村人たちは次々に瘦せた腹から息を吐き、唱和した。

ゆけや、ゆけ！

運べや、運べ！

隠せや、隠せ！

俵を担ぎ、西へと走る。

私はただ、曇り空を仰いでいた。

「源氏やな」

私はささやき声の主を見た。長老のひとりであった。

「東光寺の御坊が云うておった。三草山に平氏の陣立が上がってあったと。みな知っておる」

渡し舟での噂話がよみがえる。

平氏は幼き主上を抱えながら、京と戦うのだ。

院の宣旨とみかどのご聖旨とでは、どちらが天つ神を味方にするのであろう。

「法皇さまは宗旨替えをなされ、追討を源氏の範頼に命じたと、道中聞き及びました」

「……お前様は平家が負けると云わしゃるか」

「それはまさか」

私は口ごもった。

公家の御方々はもとの都に戻ったとはいえ、福原の京のことは近くにありてよく聞こえる。

唐天竺より湊にやって来る、あまたの銅銭や珍宝。平氏はこれら天下のお宝を、数え切れぬほど持っているのだ。

法皇の新たな御在所も、平氏の懷から出たものと知るは都人ばかりではない。

その平家が負けることがあるだろうか。

……否、考えることは無い。

源氏であるうと平氏であるうと関係は無い。

「武士どもは私の館で足止めをさせましょう」私はゆっくりと云った、「いのちの米を決して、奪われぬように」

坂の名は、不來坂ふらいざかといった。

だがその武者どもは来た。

予想に反し、憐れなまでにおろおると、坂を下って来るのが見え

た。

私は目を細め、兜の奥の表情を見きわめた。

彼らは歩むすがたの通りの、まったく疲弊しきつた顔をしていた。

五

輝くようにきらびやかな赤地金襴の鎧直垂。

すらりと長い太刀。しなやかな重籐の弓。川原毛の馬。

だが騎乗している人びとはみな、澱んだ瞳を兜の奥に忍ばせていたのだった。

私は多くの村人の前に立ち、その武士団を出迎える。

彼らの馬は、歩みを止めた。

「この村の名主か」

一番騎の男が馬上より、居丈高に云った。

「名代を司っております」私は虚言を吐いた、「名は老いておりますゆえ……あなた様は源家のお方ですか」

鬚を無造作にたくわえたその男は黙り込んだ。

お前に名乗るいわれはない。何様のつもりであるか。そう云う表情であつた。

「いかにも。私は源九郎義経」

その涼しげな声の主は、二番騎の小男だつた。

その男、まこと滑稽なあつぱれ武者姿。あごは細く、まったく鎧直垂に「着られている」ように見える。

……この男が源氏の御曹司とやらか。

見た目は貧弱そのものである。

だが、話は分かりやすそうだ。一番騎の男よりはよほど。

京育ちと噂に聞くが、なるほど東国武者の田舎臭さは感じない。

「事情がお分りなら話は早い」きわめて簡潔に御曹司は云った、「この村で休息したい」

私はしばらく考えるふりをしてから、ゆっくり答えた。

「ご休息であれば、わが館にお越しく下さい」

私は少し腰を折り、緩慢な動作で先導をつとめた。

……どうぞぜひ、当家でお体を休めていただきたい。

私が見せたのはそういう、表向きは丁寧な態度であつた。

道々、ちらりと背後の武士を仰ぎ見た。

鬚の男は不機嫌そうな顔を崩していない。が、御曹司は物見遊山のようにぼうつとあたりを眺めている。体は文字通り、馬に「揺られて」いた。

ふと、騎馬の影にいたひとりの男が目に残まつた。

鎧も着けていない、獵師風の若者。私と年は変わらぬであろう。

武士ではない。

そう思つたのは勘だ。馬を与られてはいたが、ただ曳いているだけであつた。それだけでは理由にならぬが、恐らくどこかで徴発された道案内ではないか。

だがその若者の目は如才ない知性をたたえ、鋭い視線は私の背中を捉えていた。

私はかの男の姿が、妙に心にひつかかるのだつた。

館にはだれもいなかった。

さえ殿が氣を利かせて母をどこかへ連れていったと、莊の耕人が教えてくれた。

不釣合いな館も莊の役に立つものだ。

偽りの名代の私は、莊の者たちと示し合わせた。

……本莊の方へ行かぬよう、武士どもを見張ろう。

そして、この義経なる御曹司は館でしばらく引き止めるのだ。

館に武士どもを受け入れるのも、米を隠し終わるまでのほんの一刻だけだ。

「お疲れ様でございます」私は御曹司に深く頭を下げて淡々と云つた、「当莊園にはなにもございませぬゆえ、歓待もできませぬがごゆるりとご休息下さい」

決して歓待などしない。

できやしないのだ。米は今日持ち帰つたものしかないし、馬も今回、米の運送用に住吉社から借りたものしかない。

「あな、おもしろし」

主屋広間の円座に腰をすえるとすぐ、御曹司は云った。

間の隅にある二つの焼物。私は案内しながら「片付け忘れたか」と舌打ちしたが、御曹司はあれに、まず目がいったようだ。

いずれも私の作で、住吉社に出しても遜色ないものである。いや、むしろ出来の良いものを今後のため取り置いていたのだ。

だが、中でも「最上」としていた器はそこにはなかった。

……母が持っていたのだろうか。

疑問を心の奥にとどめ、同席した主従十名を眺め見た。主人とは違つて、いずれも興味はないらしい。

先ほどの鬚男、その横にいる男がぐいと体を前のめりにした。鬚はなくすつきりした容貌だが、顔かたちは酷似している。鬚とは兄弟ではないだろうか。

その男、静かに話をはじめた。

「御曹司は院の院宣を承り、平家を討つことと相成った。院におかれては平相国の存命のみぎりより長きにわたり平家の横暴に耐えておられたが、今こそはと正義の御旗をわれら源家にお与え下さったのである。そも……」

私は神妙に耳を傾けていた。いや、傾けているふりをしていた。

……長い話になりそうだ。

案の定。

男の言葉はやがて、唾を飛ばさんばかりの熱弁に変わっていった。平家は緒人、官を極め財を貪っている。民より血を吸い取り、肥え太っている。

かつて、都には平家の放った密偵がそこかしこにいた。平家の悪口を云うとその場で捕まり、六波羅に送られそのまま帰ってこないこともあったのだ。民は恐れをなし、平家の悪口が云えなくなった。悪口どころか、話をするにも周りを見渡し細心の注意を払わねばな

らなくなったのだ。

なるほど、いかに平家が驕り、源家が彼らを成敗する正しき者なのか。

聞くに、そう思えることも多かった。

だがこの弁舌に酔うことはできない。

話の先に待ち受けるもの、それが私には分かっていたからだ。

……さしあたり米と馬が必要だ。については名代のそのほうに幫助を願うものだ」

さあ、私の戦いはここから始まるのだ。

六

「申し訳ございませぬが、私どもではお力添え申し上げることができませぬ」

「なんと申したか！」

鬚ひげは白い齒を剥いた。

私は静かに、繰り返した。

「お力添えはできませぬ」

「われらは法皇が御志を受け、院宣を賜り、朝に夕に駆けて参つたのだ。玉体御無事に今上をお救い申し上げるためにだ。それをそなた」

「この村は、さては平氏の一党であるな」

「出さぬとあらば、そなたら逆賊じゃ」

居並ぶ武者はうち揃つて肩を怒らし吼えた。いきり立ち、まさに今や太刀を抜かんばかりである。

「断るか、断るならば」などという言葉さえ聞こゆる。

「……これは慮外。平氏の味方とはとんでもございませぬ」

正直なところ、斯くも極端な態度を見せるとは思っていなかった。私は阿呆のように間延びした声で、わざと大仰そうに嘆いた。刺激をせぬため、言葉を重ねず否定した。

だが、先ほど熱弁を振るつた武者は興奮気味に糾弾する。

「虚言を申すでないぞ」

鬚も額に青筋を浮かせて続き、他にも怒りが伝播する。

「そつだ、ここは福原に近い」

「平氏の一党に違いなし」

「平氏の一党であるから同心せぬのだな！」

かくも扱いがたき坂東武者かな。

私は放蕩無頼さに辟易し、途方に暮れつつあった。

「あなかま」

ぼそり、とつぶやきが漏れた。

「止めよ、嗣信、忠信」

鬚男らの兄弟をはじめ、一同みな静まった。その声の主を仰ぐ。意外なるや、場を救ったのは御曹司九郎義経であった。

「名代よ」

御曹司はゆらりと腕を上げ、その手の扇で私を指した。

弁明をせよ、ということらしい。

私はこの不思議な源家の大将の意図を受け、語る。

「当地は土地狭隘にして平地無く水利悪く、常々生活に苦心しております。また近年來作付け悪く、庫は出拳の米に春の籾とて無く、日々に苦しむ有様。平家の方々であろつと源家の方々であろつと、無いものは渡せぬのです」

一同、暫く押し黙った。

私は一息つくと、さらに付け加える。

「私の脾肉くらいでございます。差し上げられるのは」

それも皆様には渡りますまいな。

私はそこで言葉を切り、首を垂れて上目遣いで御曹司を見た。

御曹司は興奮は無いようであったが、されど落ち着き払っているようにも見えなかった。ひっきりなしに扇を弄び、部屋の隅にある焼物を凝視したかと思うと、ぼうつとした様子で他人事のように並居る郎等を眺めている。

「義盛」やがて御曹司は短く云った、「申せ」

御曹司の命に「は」と短く答えて一礼した男。

野人のような面相であるが、郎等中で最も御曹司の近く上座に座している。

「名代どの、要は、ここには米が無いということですか」

「その通りです」

「では、この莊園では、なにを食しておられる」

「草の根に稗のかすをすりつぶした粥」

「米は近來、一度として、食したことはない、と」

意地の悪い問いだ。

「稗ばかりにございます」

「相違ないな」

義盛なる方は馬が草を食むように、いちいち噛みしめながら問いかける。

うつとおしい事この上なく、私はおざなりに「相違ありません」と答える。

「偽りを申すな！」

横から怒号が飛ぶ。

またしても嗣信忠信とか云う、鬚男であつた。

七

「偽りなど申しませぬ」

私は毅然と反論した。

現にわれらは日々の米のため、土を捏ね炎と闘う一年を過ごしたのだ。支えたのは荘の子供が山に入り採った菜、老人が育てる根、女が執る弓矢で得た獣だ。

馬も牛も食い尽くし、村が持つものは窯しか無い。米俵を運んだ馬も住吉社から購ったものだ。

なにが偽りなものか。

「近在の村々に器を高く売りつけ、米を手に入れておるといふ」義盛という方は冷淡に語った、「対価の米も例年増して要求しているそうではないか。しかも秋の収穫後のいずこにも米がある時分限り、米は多く、器は少なく、とな。あの村には米が余っている、と他所の者が申ししていたぞ」

「米の余剰と器の高騰は別儀の話です。米を多くいただくのは他方へお譲りする数が無いため」

「卑怯とは思わぬか？ 他の村々の庫のようすを察していながら、容赦なく米を要求するとは」

卑怯。

これが卑怯と武者は云うのか。

この荘は山間に細長い。土も器にはよいが作物には悪い。だから焼物で食いつないでいたのだ。

不来坂を越えれば広い土地がある。武庫川の水利良く、作物も育つ。

米が作れぬから、器と交換する。米を能く作り得るから、器を他所より手に入れる。

これは住み分けではないか。

なにも他所から強奪したわけでもない。

他所も食物が無いことくらい分かっている。先方に無ければ、こちらでも食物を得るすべは無いのだ。

だから焼物をより美しく造り上げ、住吉社に売り込むことに活路を求めたのではないか。

「お察しく下さい」

私は深く一礼し、云った。

拳を強く握り締める。親指の爪が指に食い込み、下唇に齒形を刻み込む。

「他所と同じく皆、息細うして日々を過ごしております。当荘よりお力添えできるものは……間の隅にございます器のみ」

私はそのまま顔を上げなかった。

ぽつりと、御曹司の声がした。

「飯の種、か」

……そのあと、太い声がこだました。

「愚弄者！」

続いて、鋭く、かつ鈍い音が響いた。

私は思わず顔を上げた。

嘆くことも、そして呼吸さえも忘れた。

散乱する灰色の塊りを……。

私は呆然と眺めた。

「我等は物乞いではないぞ！」

鬚武者は仁王立ちで、さらに今ひとつの器を振り上げる。

「嗣信、止めておけ」

鬚は振りかざした腕をぴたりと止めると、乱暴に器を置いた。御曹司は立ち上がり、破片を拾う。

その掌に弄ばれる破片は、時々小さな音を立てていた。

「忠信」

「はっ」

「これを預けおく」

「細かく碎き皆に渡せ。これが、この地での飯であると」
明らかにそれは挑発であつた。

忠信とやらは今一度拝礼するや、一步を踏み鳴らしながら広間をあとにした。

配下を見送つた御曹司は、私に向き直つて云う。

「名代どの、飲み水くらいは所望できましような」

「……ご随意に」

言葉が出ない。

水引く田もない、食事もまともに取れはせぬ、あらゆる皮肉が浮かぶ。それらは胸のうちに留め、打ち消してゆく。

すべてのど元までに止めた。口に出したが最後、皮肉は罵倒へと変わるやも知れぬ。

「軍議を開く。鷲尾はいずこに居る」

筆頭に座す義盛とやらが答える。

「どこかを歩きまわつておるようです」

「しよの無い奴」

御曹司は目を細めた。

では代わりに名代どのに訊ねるとしよう。彼はそう云つと、義盛に目配せを送る。

義盛はざらりとした眼を私に向け、三草山までの距離と周辺の様子を尋ねた。

私は求められたことだけを簡潔に答える。

徒歩で一刻。山まではなだらかに下りつづけ、手前には沼がある。沼を越えたそこは、ここにまして土地は狭い……。平氏の陣容は知るはずが無い。

ひととおり問答が終わると、私は「鷲尾」なる者を連れてくるように申し付けられた。

私は引き受け、一礼すると席を立つた。

これ以上、この場に留まりたくはなかったのだ。

八

館の外に出、まず気づいたのは静けさであった。

……倉にも武者がいたはずだが。

不安に苛まれながら、私はあたりを見回す。

なだらかに下りゆく地の上に、荘の人々の姿は認められない。

「荘の名代どの」

背後からの声に、驚いて身をひるがえす。

御曹司の影にいた若い獵師である。馬を不器用そうに曳いていた。不來坂を越えた、同じ丹波国は鷲尾の住人。探すよう命じられた、男でもあった。

「あなたが鷲尾のお方か」

「三郎と申します……随分、お疲れのようすですな」

会釈もせず訊ねた答えを、彼は労わりのことばで返した。

「お歴々が軍議に参れと仰せですぞ」

「俺は道々案内をするだけじゃ。行っても佐藤兄弟のコケ脅しを食らうだけよ」

飄々としたものである。

だが好意は持てない。達観しきった目は、ものごとを茶化すような印象を受ける。

それに何より……。

「あなたたちか。当荘に米が余っていると偽りを申したのは」

「長老が云うたかも知れぬな」三郎は私を斜交いに見た、「おまえさん、断ったのだな」

「断る以前に、無いのだ」

「ここを訪れたとき、子供がいたではないか。子供が生きているくらいだ。少しくらいはあるだろう」

「飢え死にを承知で渡せと」私は眉を寄せた、「あなたは武士ではないのに、よくもかく申せますな」

三郎は黙った。引き続き、私を斜交いに眺めている。

それは答えを探しているというより、むしろ私を観察しているようであつた。

沈黙に覆われる。

私もそれ以上、言葉を継ぎはしなかつた。

「平家など」沈黙を破つたのは三郎だつた、「平家は所詮、財を独り占めにし慣れ、味方してもこのような小さな荘園などに感謝はせん。いまさら、平家に肩入れして何になる」

「平家源家は関係ない」

「ならば飢えていようが死にかけていようが、源家にはおとなしく従うがよかつた」

朝日將軍は耳にしていよう。

木曾の源家の將軍、義仲さまのことだ。平家の公達が去つたあと京に入つた義仲さまは「朝日將軍」と呼ばれた。が、將軍とその郎等の傍若無人ぶりに都人は辟易した、という。

源家の人はかく成ればなにをするか分からん、と三郎は続ける。

「だが、だ。味方なれば態度は別。ゆえに鷲尾では、死にかけや婆の家を選んでそこから食料を捻出したわけさ」

いずれ死ぬ者に食わせたつて仕方ないからな。

三郎は淡々と、そう云つた。

私は、言葉を失つた。

われわれは全員が食いつなぐことだけを考えた。だから米を隠した。

だがそれは、甘い考えであつたのか。

空は黄昏がかった。

背後の山から吹き降ろす風が、身にしみつつある。

こうなれば夜の帳は今にも下ろされる。山里の凍てはすぐにやつてくる。

「ついでに云うと、身内になればさらに待遇は良い。俺は道案内を
かって出た。食物を出さずとも済んだという話さ」

「そこまで媚びるのか」

「媚び？ 時勢を見たまでのこと」

「いままでの話、鷲尾の方々の総意ではあるまい」
「うちも無い。」

と、三郎は軽く笑った。私は肯定と受け取った。

「館まで、俺はおまえさんに無言で訴えていたんだ。九郎義経さま
は甘く見ぬほうが良いと……薄ぼんやりの軽い人だが、身内の人心
を上手く操ることは長けているらしい。対立したものにはとこと
ん嫌われるようだがね……長老の一人は、従う俺の顔も二度と見た
くないと云ったよ」

「……ご助言感謝するが、いささか遅きに失したようだ」

「空腹と疲労で、武者どもは戦意を失くしていた。それを義経さま
は憎悪の念で再び鼓舞したのだよ。この莊ご自慢のかわらけを食え、
と命じることだね」

私は思い出した。

庫を占めていたはずの武者たちの姿を。本当に破片を食えと命ぜ
られたのか。それでは武者たちは……。

私は再びあたりを見回す。

三郎は意図を察し、庫を指差して物語るように話した。

「義盛さまが『これを食え』とかわらけを差し出したら、奴ら集落
のほうへと去っていったぞ」

なんてこと……！

きびすを返し、集落へ向かわんとする私の腕を、三郎はむずと掴
む。

「離せ！」

「興奮するな。おぬし、集落へ下りて行っていかにする」

「いかにするも何も」

「それで米が残ればよかつ」

「きさま……」

「それが第一義であつたのだろうか」

いま少し頭は良いかと思つた

九

丘の上の我が館からすでに集落は見えなくなっていた。

夕闇が莊を覆いつくし、冷たい夜が始まるうとしていたからだ。

「本末転倒だ」

意思とは関わりなく口をついた、呟き。

この館を去った者たちが集落でどうしているか。考えたくもなかった。考えることすらできなかった。

三郎は子供にいい聞かせるように、私に説いてみせる。

「大嵐と思うがいい。所詮いつときのこと、去るときは早く、長くとどまることはない」

私は無言のまま、なにも云い返せずにいた。
すると、

おおん、おおん。

と、低い音が辺りに轟いた。

なにも食していない腹まで響き渡る。不吉を感じ、私は思わず身をすくめた。

「聞きます、出陣じゃい」

自らの正しさを誇るように、鷲尾の三郎は大げさな身振りで声を大にした。

三郎のことは正しかった。

一人、また一人。

どこからか武者が現れる。

対面の座に居た者たちもまた、弓を携え母屋から繰り出してくる。次々に馬を牽き、馬上の人となる。

おそろしく手早く軍装が整えられる。そのさまを、私は呆然と眺めていた。

「庫の裏手にでも隠れていよ」

「隠れる」

「もう用済みだからな。姿を見せぬほうがよい。それに、ここからはなにがあっても手向かいいたすな。村人ひとりの犠牲が何十人に変わるぞ」

三郎はそう言い捨てると、さつと身を翻し軍勢の元へ歩んでいった。

三郎は振り返ることはなかった。

私は、彼が武者どもの群れに交わってゆく様子を眺めていた。彼の姿が見えなくなつてから、私は忠告どおり庫の裏手へ回つた。

夜の遠目でも彼らの姿はよく見えた。

手にかざす松明の焰に照らされ、姿が幽鬼のように浮かび上がっていた。表情さえも明確に判別できる。

ひとり九郎御曹司は焰を掲げていなかったが、彼もまた周りの灯りに照らされていた。

その姿はこれまでとは別人であつた。

爛々と輝く眼。

鷹の眼をしていた。獲物を眼のみで射抜く、酷いまでの眼光。

……狩りが始まる。

私は突然いわれなき恐怖に慄き、背筋が凍つた。まるで私が狩られるかのように、微動だに出来なくなつた。

眼を塞ぎたくなる衝動を抑え、ひたすら観察を続けた。

そこに浮かぶ一群。それは、一様に悪鬼の表情であつた。

「出陣！」

九郎御曹司の声に応え、滑るように焰の列が動いた。坂を下る情景を私は見送っている。

……ようやく去ってくれるのだ。

長く続く不作。そして飢饉という天祇地神の怒り。

源氏という人々がもたらした、災厄。

それでもこの軍勢が去るいま、あとひと月を忍べば、春は確実にやってくる。

そう、春は確実にやって来る。

住吉社の米は、細く食えば夏までは耐えられる。新しき窯づくりと器づくりに取り掛かることもできる。

苦しみのあとの春。それを謳歌する日を、私は夢想する。

去り行く焰を見送りながら……。

焰の軍列。それは私にとって、希望を出迎える儀式のようでもあった。

だがその夢は次の瞬間、無残に打ち砕かれた。

集落の間に、焰が散った。

その灯火はひとつ、ふたつ。ふたつがよつつ。

確実に増えていった。

そして大きくなっていった。

私は三郎のことばを反芻した。

……なにがあっても手向かいいたすな。

どうにも出来ない。手向かいなどできるはずがない。

私は無力感に苛まれた。

それでも……甕に水をくべると、集落へと駆けつけた。

十

館の外に出、まず気づいたのは静けさであつた。

……倉にも武者がいたはずだが。

不安に苛まれながら、私はあたりを見回す。

なだらかに下りゆく地の上に、荘の人々の姿は認められない。

「荘の名代どの」

背後からの声に、驚いて身をひるがえす。

御曹司の影にいた若い獵師である。馬を不器用そうに曳いていた。不來坂を越えた、同じ丹波国は鷲尾の住人。探すよう命じられた、

男でもあつた。

「あなたが鷲尾のお方か」

「三郎と申します……随分、お疲れのようすですな」

会釈もせず訊ねた答えを、彼は労わりのことばで返した。

「お歴々が軍議に参れと仰せですぞ」

「俺は道々案内をするだけじゃ。行っても佐藤兄弟のコケ脅しを食らうだけよ」

飄々としたものである。

だが好意は持てない。達観しきつた目は、ものごとを茶化すような印象を受ける。

それに何より……。

「あなたたちか。当荘に米が余っていると偽りを申したのは」

「長老が云うたかも知れぬな」三郎は私を斜交いに見た、「おまえさん、断つたのだな」

「断る以前に、無いのだ」

「ここを訪れたとき、子供がいたではないか。子供が生きているくらいだ。少しくらいはあるだろう」

「飢え死にを承知で渡せと」私は眉を寄せた、「あなたは武士ではないのに、よくもかく申せますな」

三郎は黙った。引き続き、私を斜交いに眺めている。

それは答えを探しているというより、むしろ私を観察しているようであった。

沈黙に覆われる。

私もそれ以上、言葉を継ぎはしなかった。

「平家など」沈黙を破ったのは三郎だった。「平家は所詮、財を独り占めにし慣れ、味方してもこのような小さな荘園などに感謝はせん。いまさら、平家に肩入れして何になる」

「平家源家は関係ない」

「ならば飢えていようが死にかけていようが、源家にはおとなしく従うがよかった」

朝日将軍は耳にしていよう。

木曾の源家の将軍、義仲さまのことだ。平家の公達が去ったあと京に入った義仲さまは「朝日将軍」と呼ばれた。が、将軍とその郎等の傍若無人ぶりに都人は辟易した、という。

源家の人はかく成ればなにをするか分からん、と三郎は続ける。

「だが、だ。味方なれば態度は別。ゆえに鷲尾では、死にかけや婆の家を選んでそこから食料を捻出したわけさ」

いずれ死ぬ者に食わせたって仕方ないからな。

三郎は淡々と、そう云った。

私は、言葉を失った。

われわれは全員が食いつなぐことだけを考えた。だから米を隠した。

だがそれは、甘い考えであつたのか。

空は黄昏がかった。

背後の山から吹き降ろす風が、身にしみつつある。

闇と灯火に覆われた小野原集落。

人は一様に、焰を眺めるだけだった。

「暖かいわい、暖かいわい」

気が触れたように叫びながら、男どもは踊りだす。

脱け殻のように座り込む、女達。

そして、そのさまを目にして水甕を取り落とした私。

その光景は小野原だけではなかった。

西の本荘集落まで焰の道は続いている。源氏の軍勢の道行を照らす、大きな松明。それが今田荘だったのだ。

……老人は半ば他人事のように云う。

「おお、向こうも火がかけられた」

小野原の南、東光寺の一角にも火の手があがった。

「坊様たちの米隠しを手伝うたしのう」

宿坊数十を数える寺である。

当然、向こうにも徴発は来たらしい。

だが東光寺も今田荘と意をひとつにしていた。坊主たちも荘の者の手を借りて、兵糧逃れをしていたのである。

今田荘のとばっちりと云えるが、そうでないとも云える。

いずれにせよ寺に火をかけるなどは、世も末だ。

だが、私には他に気になることがある。

気になるというよりは不安、であった。

「母はご存知ないでしょうか。ここにはいないようですが」

「東光寺の御坊に隠れておったかも知れぬ」

絶句した。

瞬時に、不安は絶望に変わる。

私は再び、駆けた。

東光寺は今まさに、火の手が回りはじめたところであった。

坊様たちはまだ必死で水を掛けたり逃げ惑ったりと、混乱を極めていた。

たれかに行方を聞こうにも、自分が逃げることに先に決まっている。

幾人かを引き止めてはみた。だが老母など知らぬと、足早に去っ

ていく。

……母は莊官の庇護を受けていたときより、寄進を欠かしたことはなかった。生活に困らぬ以上のもはすべてほかの人に与え、そして寺に喜捨した。

信心深い人だった。

それなのに、あの老母に気を払う者はたれ一人としていなかった

……。

私は、焰の宿坊を走り回った。

「母さま、母さま！」

熱い。

冬にも関わらず、全身から汗が吹き出ている。

叫ぶ声も嘔れ始めている。

汗を腕で拭い、私は立ち止まる。

細い、女の声を聞いた。前方からだった。

「さえ殿！」

その人は立ち尽くしていた。

焰に包まれた小屋の戸口で火の粉を浴びている。

髪はほつれ、衣の裾は乱れ、腕はただれている。そして裸足の両肢に滴る血。

彼女の身に襲い掛かった出来事を、私は瞬時に悟った。

「さえ殿、早う逃げましょう」

私が促すも、彼女は動かなかった。かわりに虚ろな声で、答える。

「おばさまが、いちばん、美しい耳壺を、忘れたと」

小屋が音を立てて崩れる。さえは目を逸らさない。

「中に取りに、かえっていらして」

激しく火の粉が舞い上がった。

私はもう何も出来ない。

声も無くただ彼女を抱きしめ、雪のように降る火から守ることしかできない。

私はさえを背負い、小野原へと歩き出した。

さえは私の耳元でなにかを呟いている。私は足を止め、いま一度訊ねた。

「きれい」

私は顔を上げた。

夜闇の今田荘を覆う焰。それは物語に聞く龍が、駆け抜ける姿に見えた。

なにも無い莊園の最期を彩る焰。

「ええ。美しい」

私の肩が濡れた。

続いて肩越しに低い嗚咽が聞こえ、私はそっとまぶたを伏せた。

やがて、龍は朝焼けとともに去っていった。

(了)

十一

莊園は灰燼に歸した。

住む屋は無い。殺された者もいる。犯された女人もいる。

しかし、食べ物はある。

「米を出さなんだから、かような目にあつたのだ」

と怒りを他者にぶつける者もいる。その一方で、

「出したところで『大松明の策』は行われたであらう」

と返す者もいる。さらには、

「いまさらそんなことを云い合つてもしょうがない」

と、したり顔で語る者もいる。

かくの如く莊は壊れた。壊れたのは外見だけではなく、人心まで壊れたのだ。

特に小野原は酷かった。

居るべなく、凍える指を瓦礫を燃やして暖める子供。

食うものはあるが、それだけだった。集落の再建は遅々として進まない。

私は小野原窯の創設をあきらめた。

母がいないからではない。

小野原ではなく、窯のある三本峠への川筋に居を移す者があらわれたからだ。多くは耕す土地を持たぬ者たちであった。

小野原を捨てる者が現れたということが、私に小野原窯を断念させた。

だが内心はあきらめ切れなかった。日々腹の大きくなるさえをひとりにするのは心配だった。さえもまた、親は既に亡い。

「わたくしのことは心配なさらずに」

さえは力強く、私を送り出してくれた。

だが、その瞳には私への遠慮が見えるような気がしてならない。

——この児は、あなたの児ではないのだから。

それは私のうがった見方だろうか。

再び三本峠の窯に火が入ったのは、山桜の話聞くところであつた。そのころ、諸国莊園への兵糧米を徴発を停止する触れを、鎌倉の源氏が出したという話も耳にした。あとひと月でも早くその触れを出してくれていたら、今田莊は灰にならなかつたのではないか。……否。いつでも力ある者は都合が良い。平氏の攻め手、御家人の勝手な振舞いを封じるための触れであり、莊のことを考えての触れではないのだ。「もしや」と考えても仕方のないこと。この莊が平氏を攻める道筋にある限りは、避けえぬ運命であつたのだ。

焼物の製作は軌道に乗ってきた。

青い稲を手入れた次の日、窯を守る。隔日交代で、私は小野原と三本峠を往復した。

その年は不作とはならなかつた。

器もそここの物が揃つていた。

秋。人々が落ち着きを取り戻したころ。私は提案した。

新しき窯を構えよう、と。

私はまた、焼物を住吉社に売り込みに行くこととなつた。

今度は値切を求められるかも知れぬ、という不安はある。私も、昨年の質を越えてはいないことに気づいている。だがそうはさせない。

旅立ちの前、朱い空の夕刻。

母子は静かに座つていた。かつて、御曹司義経さまが座していた場所である。

「私は父の顔を知らない」

さえは静かに乳を飲む児から目を上げる。

私はその児に視線を落とすと、他愛の無い躁言を続けた。

「この児は実の父は知らないかもしれない。だが父と呼べる人がいる。それが私はうらやましい」

彼女たちを幸せにしたい。

心の中でいつも、隣にいる。そんな存在になりたい。

私はそう願った。

さえは微かに微笑むと、再び抱く児に視線を落とした。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4235c/>

焰駆けつ

2010年10月8日15時53分発行